

# 主体美術

## SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。  
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の  
集団として積極的に活動していきたいと思っております。  
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本  
に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局  
〒168-0063  
東京都杉並区和泉4-36-10  
齋藤典久 方 TEL / FAX 03(6786)1006



小菅光夫「壺の鬼」

2023.2  
No.112

### CONTENTS

- 1p 巻頭言 ……豊福 光行
  - 2p 第57回主体展審査について ……藤本 卓
  - 3p 第57回主体展陳列について ……藤田 俊哉  
YouTube【公式】主体美術協会  
チャンネル「主体展ぶらぶら鑑賞」  
配信、SNSについて ……井上 樹里
  - 4p 巡回展報告(京都) ……森 慎司  
巡回展報告(名古屋) ……伊藤 明美
  - 5p 第57回主体展 企画展示  
「私の仕事 いま・むかし」  
「主体展秀作作家(2022)  
と会員小品展」のお知らせ
  - 6・7p 2022年新会員紹介
- ### ART WAVE
- 8p ●アトリエ訪問 vol.10  
小菅光夫さん  
秩父のアトリエを訪ねて
  - 9p ●フォトエッセイ  
横地 光 / 長崎羊子
  - 10・11p ●各地の美術展から  
「生誕110年山田光春」  
名古屋市美術館  
「ドナルドキーンと画家井澤元一」  
京都文化博物館  
「没後30年平野遼展」  
北九州市美術館
  - 12p インフォメーション  
展覧会記録・編集後記・その他

## 「近況、幼少期、現在の制作へ」

豊福 光行

先日、原稿の依頼があり、快く引き受けることにした。文章を作成する事はどちらかと言えば苦手な方で苦心を重ねる。言わば言葉にする語彙が発見できず、何時もの事ながら探すのに時間を費やすが、今回は嬉しく感じた。

書くこと、話すこと、聞くことは若干負担を感じる時があり、最近話す時、特に電話は聞き取りにくく、十分に相手の話が理解しにくいので、会話の成立が難しい。時には誤解を招いたりして申し訳なく感じている。軽い難聴の症状と耳鳴りに悩まされて、日常ジーンジーンと大きな蝉の鳴くような声が出て、頭の中は一年中夏の季節のまま。それでも天候に恵まれた日は季節に関係なく、温暖な日を選んで近くの公園を散歩。新鮮な酸素を多く取り込んで、闘病生活の中、日光浴と森林浴でデトックス効果を生み、少し免疫力が高められているように思う。空気の流れを肌で感じて、刻々と変わりゆく残影が印象に残り、一日の幕が降りる。体力はかなり衰退して、細々と命の火を灯しながら制作して行く余力は少しだけ残っており、安堵する時がある。

光陰矢のごとし、数十年の歳月が流れ刹那。想えばタイムスリップしたような感覚なのか郷愁を誘う。記憶の糸を手繰り寄せて幼少期に辿り着き、断片的であるが育ってきた環境がカラー映像で滲み、ぼんやり写し出されている。先ず目に焼き付いた光景は、四季それぞれ趣きがある山間部の我家。同様に日当たりがあまり良くない家がもう一軒、ポツンと二軒家である。家の辺りは約20m程の高木、杉と桧の針葉樹とどんぐり、桜などの落葉樹が混在したどこでも見られるような光景で、春には所々、山桜、辛夷の白い花が目につき、あちこちから強い芳香を放っており、季節を肌で感じながら散歩している。北へ100m程離れた所に、澄んだ小さな小川が流れていて、その土手の向こう側に見渡すかぎりの菜の花や、多くの蜜蜂が飛んでいるピンクのレンゲ畑、稀に見る純白のレンゲを探し発見できた時の感激は忘れ難い。とりもなおさず、文部省唱歌の世界で回想にふける。

家はかなり古く、電気・ガス・水道のない生活が小学校2年生の時まで続き、自給自足の生活が当たり前と思っていたので、大変な時代とは感じていない。冬になると気温が氷点下になる時があって霜柱が立つ。朝起きたらぼっかりあいた靴底に藁を敷きつめ、破れた靴下で登校。夜はことぼし(鹿児島方言)と言ってローソクの光量しかない石油ランプ、辺りは暗く、何か用事の時は手に持って慎重に移動しなければならず、外のトイレまで行くのに時間がかかっている。昼間、家の中は薄暗く狭い部屋が4つ、破れた障子と襖で仕切られている。土で固められた約10畳程のでこぼこした土間に竈があり、周辺は煤で少しばかり黒ずんだ土壁、そばに暖をとる囲炉裏、柱、梁、筋交いを含め、全体が長い歳月で古い我家の歴史を刻んでいる。ある日、庭の地面や土壁にスクラッチの落書き、文字のようなアルファベットのようなものが出現して忘れ難い記憶の1ページとして残っている。

土壁の補強として使用されている割り竹で編んだ格子状の骨組み、柱、梁、筋交いのイメージを黒いフォルムの中に取り入れ、エスキースを重ねて抽象化して来ている。先ず、水平と垂直の関係と対角線が意識されて、描き始めに緊張が走る。たいへんなことで非常に難しい。内容の咀嚼、プロセスの中で格闘、強靭な画面を展開させ、より強固な方向へ舵をとって造形しているけれど、模索状態なのかなかかなかどらぬ時が多い。(黒いフォルムのシリーズより)

時代に取り残され、アナログの生活ではあるが、斬新な発想を展開させ可視化することを目標にしている。堅忍不拔の精神、私にとって重い響きを奏でている。

作品は作者を離れ、ひとりて未来に向かって歩いていく。

すぐれた作品は感動を生み、鑑賞する人に雄弁に語りかける。

やがて作者の言葉は消えて行く。

力になっていただいた主体美術の皆さんに感謝。

# 第57回主体展報告



▲感染予防対策をとった受付作業



▲審査の様子。一席開けて密を避ける。今回は声出しはOK。



▲図録用撮影風景

## 第57回主体展審査について

事務局展覧会部 藤本 卓

2022年8月下旬、新型コロナウイルス第7波の影響が心配される中、第57回主体展の搬入・審査は予定どおりの日程で東京・上野の東京都美術館にて実施された。

昨年度とのもっとも大きな違いは、サイレント審査(感染防止のため意見交換を廃し挙手のみにより進める手法)ではなく、感染防止対策に取り組みながらも従来どおり活発に意見交換をしながら審査が運営されたことである。このことは、今後も先行きが見えないコロナ禍と主体が共存していくうえで、非常に大きな意味をもつ。

なぜなら主体が創立以来大切にしてきたポリシーのひとつに、「審査において議論を尽くす」という方針があるからである。他団体の実情についてここで触れるつもりはないが、主体は発足の当初から民主的な運営を標榜し、ヒエラルキーにとらわれない自由な発表と意見交換の場を模索してきた。また、その姿勢を堅持してきたことが現代の日本画壇において独自のスタンスを確立している所以でもある。創立以来半世紀以上を経ていまだこの方針が崩れていないのは、ひとえに先人たちの献身的な努力によるものか言いようがない。周知のとおり民主的な手続きほど時間と労力のかかるものはないからである。コロナ禍によってそうした主体の良さが失われてしまうのであれば、これは主体の根本的な存在意義に関わってくる。一人または一部のいわゆる権力者により審査結果も運営方法もサクサク決まってしまうなら、主体が主体である価値はなくなると個人的には思う。

さて、今回の審査状況だが、3日間の期間でのべ145名の出席会員によって議論が進められた。この人数については評価が分かれるかもしれな

いが、第7波が依然猛威を振るっていた中で地方からの出席者も含めてこの人数となったことはひとつの成果であると思う。内容についても、具象・抽象、あるいはサイズ・技法を問わず多様な作品が寄せられ、それらに対して時には表現の本質的な意味から問題提起する議論が交わされたことは、まさに審査において議論を尽くす姿勢が復活したこととして嬉しく感じる。会員歴の長短や社会的立場にかかわらず、絵について自由な意見表明の場が確保されているのが主体の審査であるとあらためて認識することができた。注目に値する作品が審査会場に運ばれて来たときに、全体から「オ～」という声にもならぬ声がかかると満ちるのが懐かしく感じられると同時に、そうした力作をコロナ禍にもかかわらず本展に出品して下さった方の情熱に敬意を抱いた次第である。また、審査における絶対評価、相対評価、個人内評価といった概念についても再度共通理解できたことも大きかった。

追記事項としては、審査の情報管理におけるIT化が今回さらに促進されたことも付け加えておきたい。具体的には無線LANの活用により審査会場での経過をリアルタイムでバックヤードの作業班と共有できたことである。このことにより効率化と正確性が大きく担保されることとなった。背景にはITを担当する専門局員の配置が大きく、今後も期待を大にしている。

以上の経過を経て、入選者107名、うち佳作作家22名、秀作作家11名、会員推荐5名を選出した。審査方針の細部については、今後主体の現状にあわせ適宜見直しが必要かもしれない。しかし主体の根本精神は変わらない。本年度の審査運営が次年度以降のさらなる充実につながることを期待してやまない。  
(2022年12月)

# 第57回主体展陳列について

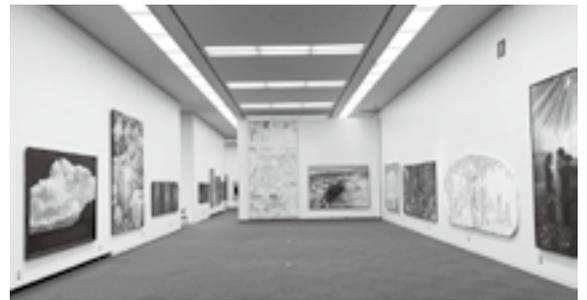
展覧会委員 藤田 俊哉

展覧会委員会が改選され、57～58回展は返町勝治、續橋守、長沢晋一、中嶋修、福田玲子、藤田俊哉、山本靖久の7名が任にあたることとなった。

さて、第57回展は全体として会場がすっきりと見やすく、良い展示になったとの声が多い。会員の部屋を従来より一つ増やして1～9室としたことが功を奏した。事前計画に反して会員の作品が入りきらなかったこと、一般出品者の作品がやや少なくスペースに余裕があったことが理由である。今回の結果を受けて、58回展も同様に9室まで会員の部屋にする予定である。

展示全体の流れについて、近年は具象と抽象の部屋を交互に切り替えて見せていく方法にしていたが、煩雑に感じるという意見もあった。58回展では抽象・具象の進行をシンプルにまとめる方向で考えている。

近年定着してきた感のある企画展示室は「私の仕事 いま・むかし」というテーマで展示。創立～23回展の会員17名の参加を得て、各人の新旧作品の対比を試みた。出来るだけ古い年代の作品と現在とを並べて見ることで、長い時間の中での作家の変貌や、変わらない本質に迫れないかという企画の意図であった。来場者からも「興味深い」と好評だったので、次回も同企画の第2弾として24回展以降の20名弱の会員で構成する予定。



1室



4室 企画展示室「私の仕事 いま・むかし」

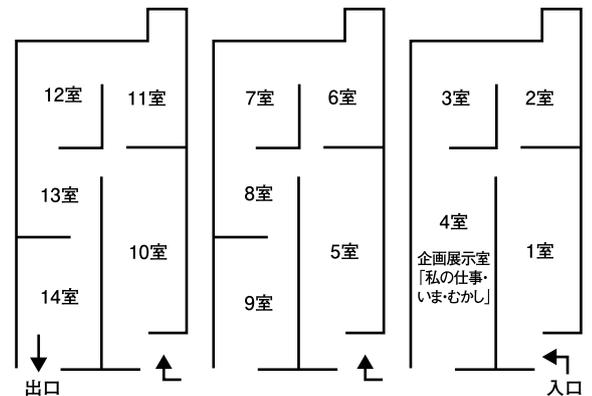
今回の企画室展示について、以下の反省点について次年度に向けて改善したい。

- ①企画のタイトル表示や意図を説明する案内文について、掲示物が控えめ過ぎたこと。見やすくかつ内容の充実したものにしたい。
- ②事前の広報(機関紙、HP、SNS)で、情報発信をもっと積極的にした方が良かったのではないか。
- ③展示作品のキャプションを充実させたらどうか? 作家の言葉などを盛り込む形や、鑑賞しながら手に持って見られるチラシ形式の物をつくるか。

その他、本展とは別の巡回展のことだが、壁面に対して展示作品が多過ぎて、近年は過密な印象になっている。佳作家の巡回を見直すことで改善したい。また、会員の複数組み合わせ作品の展示の難しさについて、毎年問題になっている。数が増えると撮影や展示作業に支障をきたす。巡回展ではなおさらである。会員一人ひとりが展示作業の実際を考えて作品を計画して欲しい。

もうひとつ、昨年と全く同じ位置の展示となった会員作品があったこと、未然に防ぐために展示位置の記録を残して次年度に備えたいと考えている。

(2022年12月)



## YouTube【公式】主体美術協会チャンネル「主体展ぶらぶら鑑賞」配信、SNSについて

研究部 井上 樹里

本年度も新型コロナウイルス感染症対策の為、講堂やスタジオでのイベント、アーティストトークや会場研究会は中止、会員をはじめ出品者や来場者皆様と主体展が繋がる為何が出来るかを改めて模索した1年となりました。

今年度主体展YouTube公式チャンネルでは、本展会場を実際に観て歩いているかのようにライブ感のある動画「主体展ぶらぶら鑑賞」を企画、撮影をしました。今回は本展とあわせて巡回展の様子も配信しております。東京都美術館、京都市京セラ美術館、愛知県美術館それぞれの魅力ある会場での展示をお楽しみください。尚YouTube公式チャンネルでは昨年度の会場風景動画も引き続きご覧いただけます。

そして新たに主体展の情報が広く認知されるよう公式Twitter・Facebook・Instagramを公開しました。スマートフォンやパソコンからいつでもご覧いただくことができます。ぜひYouTube公式チャンネルとあわせてお気軽にフォロー、シェアください。

これらの活動により今まで主体展を知らなかった方々へ私たちの様子をお伝えする機会が増えるようになりました。今後も研究活動を通じて主体展の魅力を幅広い世代へ発信し、会員、出品者、主体展の開催を心待ちにしてくださる皆様と交流を深めていくことができるよう運用に努めます。

企画の遂行にあたりご協力くださった各地の会員の皆様、本当にありがとうございました。(2022年12月)



「会場一周」編、「第1,2,3室」編、「第5,6,7,8室」編、「第9,10,11,12室」編、「第13,14,企画展示室」編、「京都巡回展」編、「名古屋巡回展」編に分かれています。

主体美術協会チャンネル

パソコンからは  
左の文字で検索  
スマホは右のQRコードから



主体美術ツイッター  
主体美術フェイスブック  
主体美術インスタグラム

<https://www.twitter.com/shutaiten>  
<https://www.facebook.com/shutaiten>  
<https://www.instagram.com/shutaiten>

# 巡回展報告

## 京都展

事務局 森 慎司

京都巡回展は9月27日から10月2日の6日間を会期として、京都市京セラ美術館2階南回廊を使用しての開催となりました。

昨年の展示では壁面不足で作品同士の間隔が狭く、作品と観覧者の質は高いと評価をうけたものの非常に窮屈な展示となり効果を十分発揮できない状態とも言えました。今回展ではその反省から一部の作品を2段掛けにするなどして間隔を確保しました。会場効果が上がっただけでなく展示作業にかかる時間も短縮できこの方針は成功したと思っています。しかし巡回対象作品(会員・秀作家・佳作家・地元一般出品作家)の総面積の増加傾向は、展示作業面だけでなく運送面でも限界に近く、搬入出展示作業で時間的にタイト、体力的にもへビーな作業になってしまい、有効な対策が必要です。

新型コロナ第7波の終わりの時期に開催となり、入場者数が昨年より増えることを期待していましたがむしろ下がってしまう結果となり、これには館内の導線環境の問題、美術館側の公募団体などへの広報体制の問題、チケット販売制度の問題、さまざま原因は考えられます。テレビや雑誌で美術館の内装デザインの紹介などがされているのを見ますが、その宣伝効果はこちらにはあまり反映されておらず残念です。しかし美術館内に人がいないというわけではなくエントランスやミュージアムショップには来館者が多くいますが、文化財としての美術館自体を見に来た人が多いのかもしれない。

が、実のところ問題はそれ以外の、宣伝広報の仕方、展覧会記録や展示会場自体のあり方などにもあるのかもしれない、根本的に鑑賞者ニーズに合った方法を考えていかなければならない時期ではないか。たとえば一般鑑賞者の同時代の美術作家に対する認識が変わってき



京都展  
会場風景



て鑑賞者に対して従来通りの期待をしているだけではいけないかもしれず、鑑賞スタイルの変化や美術作品に何を求めているのかを整理しなおして、あらたな魅力的な切り口を提示する広報など考えてみてほしいのかもしれない。

やはり展覧会を開催する目的の第一はより多くの方に見てもらい何かを感じ取っていただきたいということなので、単に展覧会を開くことが目的化してしまっただけでは本末転倒です。より良い作品をより多くの人と共感するためにすべきことは何かを考えていきたいと思っています。

(2022年12月)

## 名古屋展

事務局 伊藤 明美

名古屋巡回展は、愛知県美術館ギャラリーにて2022年10月18日(火)～10月23日(日)の開催となりました。YouTube【公式】主体美術協会チャンネルから第57回主体展が視聴でき、その様子から私達も巡回展開催に向けて、審査等に出席された会員の状況報告文と併せて「名古屋展準備の例会」で話し合いができました。

今回は搬入作業に主体展事務局から3名の方が加わり、名古屋展陳列169作品のキャプションもいただきました。本展の陳列に沿った会場配置図を作成会員から受け取り、各室の主となる担当会員を中心として各自が作業しました。会場全体が、「未来に向けた変化を目指す展示」ができていくかなど、本展での「企画展示室」作品の配置などを含め、主体美術の精神や姿勢を考慮した陳列となったと思います。

入場総数は1,170名(第56回1,080名、第55回展1,745名)になりました。当日入場券・図録の売り上げは伸び悩み、原因を探っています。コロナ禍でもあり、今年も広報活動には皆工夫して取り組みました。マスコミ各社への招待状送付、会期前に中部事務局が新聞社へ後援依頼に伺いました。その結果、初日に中日新聞社の取材があり、翌日に「生新たな芸術の創造を探る作品169点を展示、名古屋で主体美術協会による第57回主体美術名古屋展が、18日県美術館ギャラリーで始まった。」などと会場写真も合わせて掲載されました。早速、新聞を読んで来たという方々から「個性的な作品が並び活力が湧いてきた。」「地から天空への挑戦が美しい。」「平和を思い絵の前で合掌しました。」「海に春の訪れが待たれますね。」「絵画の力が響いてきた。」などと図録、機関紙を手に熱い感想もありました。中城芳裕氏の遺作には惜しむ声が多く聞こえました。

また、国際芸術祭あいち2022終了直後の会期となったことで、美術系専門学校校長先生が多くの生徒さんを引率し入場され、



名古屋展  
会場風景



「独自の強い作品群で生徒には大変刺激になりました。」などと話されました。

主体美術協会ホームページに、名古屋市美術館常設展示「郷土の美術：生誕110年山田光春」が紹介されたこともあり、観覧者の関心が高いようなので、「主体美術協会」をより幅広く知っていただくために、会場内に「主体展を探る」というコーナーを設けました。主体展作家の出版物や画集、作家紹介書籍「愛知洋画壇物語PARTII(中山真一著)」の他に、山田光春氏関連資料ファイルを並べ、「主体美術関連資料ご案内」チラシを配布することで主体展応募に繋がるようにしました。

来場された県内外美術関係者、市町村長の皆様方には紙面をお借りしてお礼申し上げます。

12月に「名古屋展反省の例会」を持ちました。厳しい状況下に遭っても作家一人一人が「今後に繋ぐ主体美術協会創立趣旨の精神」を軸に捉え制作していくことと確認しました。

「第58回主体展」に向けて、皆でまた始まりました。(2022年12月)

# 『私の仕事 いま・むかし』

主体展では38回展(2002)から4年に渡り「私の仕事 今・昔」という研究シンポジウムを講堂で開催し、延べ7人の会員に自作の変遷をスライドショーの形で語っていただきました。更に48回展(2012)では「主体展・私のこの一点」という企画で会員が過去の自作から一点を選び画像とコメントをパネル展示しました。

57回展では趣を変えて新作と旧作を並列展示することとし、創立から23回展までの現会員20名の内17名が参加されました。壁面の関係で旧作は30号以下に制限されましたが、作者それぞれの思いが感じられる展示になりました。

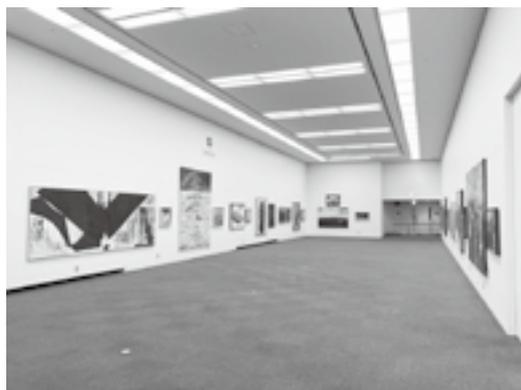
## 第57回主体展 第4室

### 企画展示出品作家(敬称略)

浅野 修	種倉 紀昭	
岩見 健二	筑波 進	福田 玲子
榎本 香菜子	手塚 國彦	保坂 淳
小菅 光夫	中川 奈哥子	水村 喜一郎
佐藤 善勇	中島 佳子	森田 六男
返町 勝治	中村 輝行	矢野 利隆

**第57回主体展 企画展示 「私の仕事 いま・むかし」**

「美」を追求し、幾つかの岐路を経ながら辿ってきた道程(みちのり)。出発の頃、また表現を模索しながら通りすぎた道上的のマイルストーンを振り返ってみる。新作と旧作を並べて変わったもの変わらないものを確かめ、その間に累積した時間に思いを寄せて、「個」と「集団」の未来を展望したい。



# 「主体展 秀作作家(2022)と会員小品展」

ヒルトピア アートスクエア ヒルトピアショッピングセンターアーケード内(ヒルトン東京B1F)[新宿区西新宿]

2023年2月16日(木)~28日(火) 11:00~18:00 ※最終日は14:00まで

西新宿「ヒルトピア アートスクエア」での3年ぶりの開催になります。57回展の秀作作家は展示室A・Bを使用しての大作を、会員(有志)は展示室Cを使用しての小品の展示になります。新宿駅西口、京王百貨店前21番乗り場よりシャトルバス(無料)が出ますので、お気軽にご来場ください。



## 出品作家 (50音順)

「展示室A+B」秀作作家(2022)展	井川 雅子	「展示室C」会員小品展	有馬 久二	川端みち子	戸田 礼子	福田 玲子	森 慎司
	金沢 綾子		石田 俊哉	菊地 史津	中川 奈哥子	藤原 アツ	森脇 ヒデ
	川端みち子		上野 信彦	黒川 洋	長崎 羊子	保坂 淳	山田 礼二
	田中 郁子		榎本 香菜子	桑原 雄一	長沢 晋一	前川 アキ	山本 靖久
	西森 聰子		大友 恵子	小林 智江子	中嶋 修	前山 陽子	渡辺 良一
	長谷川好美		大西 佐頼	齋藤 典久	新島 知夏	増田 節子	
	山田加代子		岡本 裕介	佐藤 善勇	新野安紀子	松尾 陽子	
			小野由紀子	返町 勝治	畠 理弘	松本 恵美	
			柏木喜久子	續橋 守	鳩貝 悦子	松元美奈子	

## 2022 NEW MEMBER 新会員紹介

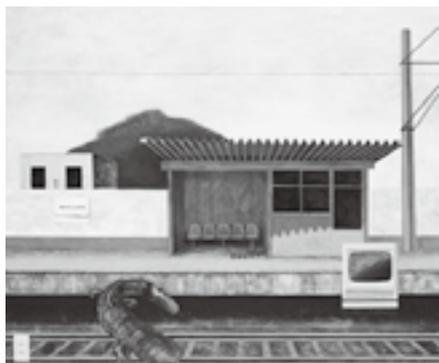
第57回主体展にて会員に推挙された5名の方のプロフィールです。自作について語っていただきました。



### 足立 晋平 (あだち しんぺい)

■生年月日 1959年4月7日 ■出身地 兵庫県

■制作に使う主な素材  
キャンバスにアクリル絵具・油彩絵具



「フラッシュバックA」  
F130

#### ■自作について

昔から好きなものや興味のあるものがなかなか捨てられなくて自宅や実家に溜め込んでガラクタの山になっており(妻には「今にゴミ屋敷なるので、早く何とかしてくれ。」といつも叱られています)、そのゴミの中から特に愛着のあるものを選んで、近所や通勤途中に見かける風景と重ね合わせて作品にしています。もっともっと描き込んで重厚感のある作品に仕上げたいと思ってキャンバスと向き合うのですが、なかなか思うように制作出来ていないのが現実です。

#### ■会員になってやりたいこと

永く主体展に出品し続けると、会員になることだけが目標になってしまい、いつの間にか初心を忘れてしまっていたんじゃないかと思っています。どの公募展に出品するか決める為にいろんな展覧会を観て「主体展しかない!」と感動したことを思い出し、もう一度自分自身の創作の原点を見直して主体美術協会の会員として恥ずかしくないよう日々研鑽を積み、精進したいと思います。

### 大澤 政和 (おおさわ まさかず)



■生年月日 1947年11月21日  
■出身地 長野県  
■制作に使う主な素材 アクリル

「移ろふものへII」  
182×135cm



#### ■自作について

退職後の手すざびに始めた絵手紙が絵を始めたきっかけです。絵手紙だけでは飽き足りなくなり洋画の世界に踏み込んだとき、絵の具の使い方から構図の取り方まで、初歩から指導してくれたのが坂本勇さん、前田博さんでした。そんな縁で主体美術の門を叩き、今回会員の端に加えていただいたことはこれ以上ない望外の喜びです。移ろいゆく生命への愛惜をテーマに描いています。幼少のころ金魚鉢の金魚をギュッと掴んだら動かなくなったこと、生命の儚さを知った最初の出来事でした。そんな記憶を追いながら制作を続けています。

#### ■会員になってやりたいこと

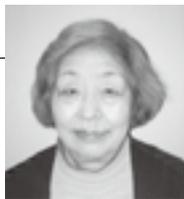
絵を描くことは自分をすべてさらけ出すこと、自分自身を表現することだと考えています。心をさらに磨き、自分をもっとさらけ出せるように、体力に自信があるわけではありませんが、体当たりで表現を追求していきたいと思っています。よろしくお願いたします。

### 川端 みち子 (かわばた みちこ)

■生年月日 1943年2月26日

■出身地 群馬県

■制作に使う主な素材 油絵具



「遺された形VI」  
F120

#### ■自作について

主体展は1997年が初入選です。古代劇場などを風景として描いていました。石積み的美しさに魅せられ、歴史の形を現代の感覚で形作ろうと思っています。第57回展では力が抜けて良かったと評価していただきました。

#### ■会員になってやりたいこと

この度会員に加えていただき、新しい世界でさらなる勉強の機会を与えられたことに感謝しています。今度は会員として少しでも協力できればと思います。どうぞよろしくお願いたします。

## 西森 聰子 (にしもり さとこ)

■生年月日 1977年11月24日

■出身地 和歌山県

■制作に使う主な素材  
油絵の具・アクリル



### ■自作について

なぜ抽象なのか、自問自答しながらずっと描いてきて、そこに存在する光達が美しく、絵は抽象は私にとって光そのものなんだと感じてきました。いろんな自然の光に触れ、エネルギーとなりそして形になる。なにものでもない、絵の中では私が私であるために描き続けていきたいと思っています。

### ■会員になってやりたいこと

絵を出品して20年がすぎ、会員に選んでいただきこれからなにができるのか、色々学ばせていただきたいと思っています。



「無礙なる心」F120

## 長谷川 好美 (はせがわ よしみ)

■出身地 東京都

■制作に使う主な素材 アクリル



### ■自作について

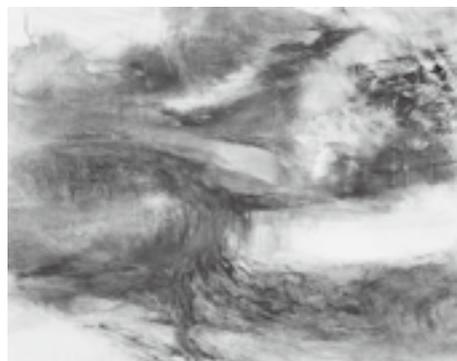
海をテーマに、目に見える風景に重なる大気やエネルギーの広がり、もう一つの風景として、感じた思いを描いています。

### ■会員になってやりたいこと

初めて主体展に出展した時から、何か終わりのないものを感じました。そして今、私の前には果てない道が続いています。これから踏み出す一歩に、色々な思いがやって来ますが、主体展は絵画の深さを知る道標となりました。

主体美術協会を大切に支えて来られた会員の方々に、この度加えて頂きお手伝い出来ることを光栄に思います。

皆さんに学びながら、少しでも進んで行きたいと思います。宜しくお願い致します。



「もう一つの風景II」F100

## 第57回主体展受賞者

### 秀作作家／新会員 5名

足立 晋平(京都府) 西森 聰子(和歌山県)

大澤 政和(長野県) 長谷川好美(千葉県)

川端みち子(東京都)

### 秀作作家 6名

井川 雅子(兵庫県) 末田八重子(愛知県)

池田 正子(北海道) 田中 郁子(北海道)

金沢 綾子(神奈川県) 山田加代子(群馬県)

### 佳作作家 22名

糸賀悠加里(茨城県) 唐木 良和(兵庫県)

内田結美子(神奈川県) 喜々津宏恵(東京都)

遠藤 照美(神奈川県) 幸坂裕美子(茨城県)

小川 夕星(千葉県) Jimmy-Atget-Ohashi(東京都)

落合 修一(茨城県) 清水 佳奈(茨城県)／新人賞

加藤紀久子(東京都) 鈴木 遊(神奈川県)

陳 佳き(東京都)／新人賞

土川 祐子(千葉県)

日比野美穂(三重県)

日向由美子(埼玉県)

藤木もとひろ(東京都)

本間 由佳(神奈川県)／新人賞

宮本 圭子(東京都)

山崎 清子(神奈川県)

山本 弘子(愛知県)

和田 貴子(愛媛県)



本展会場内での授賞式(出席者のみ)

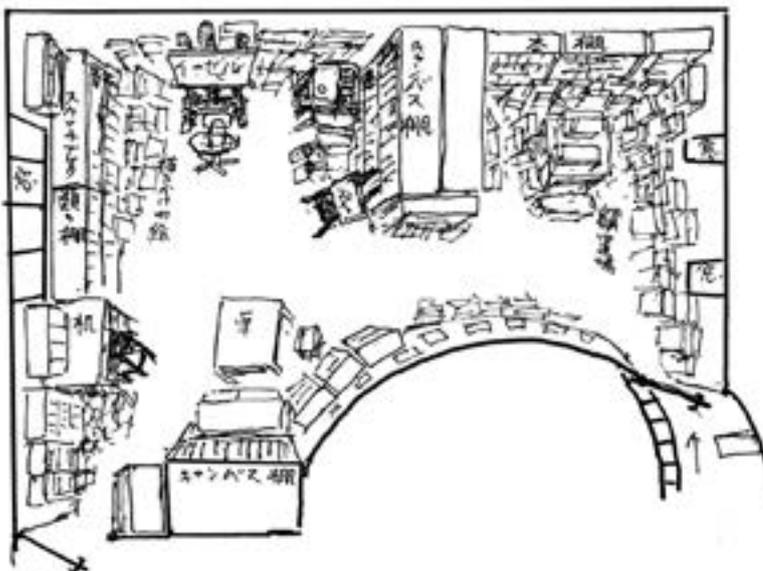
# アトリエ訪問 vol.10

## 『小菅 光夫 さん』一秩父のアトリエを訪ねて

埼玉県小鹿野町

取材／大西佐頼・新野安紀子  
文／大西佐頼

小菅光夫のアトリエ



池袋駅から特急レッドアロー号で1時間20分の西武秩父駅より、車で峠道を走ること13キロほど。小菅光夫さんのアトリエは埼玉県秩父郡の小鹿野町にあります。

### ■大きな窓と円柱、おもちゃ箱のようなアトリエ

辺り一面遮るもののない2階のアトリエからは武甲山をはじめ秩父の山々が見えて、手前には金色の田畑が広がっています。室内には1階からのびる螺旋階段を取り囲むように大きな円柱状の壁面があり、そこには無数の小品が掛けられていて、その他の壁面も間仕切りのような大きな棚も床も、数えきれないほどたくさんのキャンバスや小品、描きかけの作品がぎっしり詰まって、おもちゃ箱のようです。

机の上のお手製の焼き物の灰皿には、小鬼がいたずらっぽい顔で立っていて、よく見れば棚の上で小鬼たちが思い思いの格好をして立っていたり、垂れている紐にぶらさがっていたり、わくわくするような立体作品も所狭しと置かれていました。就職という形で企業から雇用されることなく絵だけで生計を立ててきた小菅さんは、かつて自宅で幼稚園児から小学生くらいの子どもたちを教えていて、子どもたちに見せるための参考作品として粘土(山に行けばとれる)を使った作品をたくさん作ったそうです。絵を教えることもありましたが、虫を捕まえたり、釣竿を作って魚を釣って家に帰って食べたり、まゆ玉を作ったりなど、山や川に連れて行っては何か作って遊ぶという教室でした。子どもたちには繰り返し「人の真似は絶対いけない、自分の心の中を表現しなさい」と言っていたそうです。

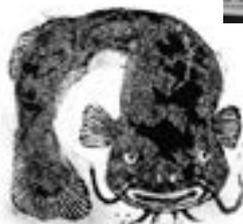
### ■版画作品

機関紙の表紙に掲載する作品がないかお聞きすると、それなら版画が良いのではないかと、大きな作品ファイルをいくつも出してきてくださいました。タブローのイメージしかなかった私は、あっと驚きました。ファイルに無造作に入れられたたくさんの木版画は、どれも見たことのないような洒落なものだったからです。猫やなまずのような生き物、子どもたち、そしてじゃがいもや玉ねぎをモチーフにしたものもありました。壺の中の鬼は、秩父という土地から出たいのに出られないような悶々としている自分そのものだ、と笑っておられました。



▲円柱状の壁に小品がいっぱい！

▶子どもたちと作った作品。



### ■小菅さんと小鹿野歌舞伎、地域文化保存の担い手として

小菅さんは生まれ育った秩父の祭りや民衆が演じる地元の歌舞伎などを絵のテーマにしてきましたが、時代とともに維持できなくなり廃れていくのを目の当たりにして、自分が作品として表現したい心の中のふるさとが失われるような思いがしたそうです。

そして歌舞伎舞台(民衆が自ら演じる)の保存や、国の重要文化財でありながら倒壊の危機にあった巨大な茅葺屋根の蚕農家「内田家住宅」の修復、小鹿野歌舞伎の創始者初代坂東彦五郎の墓の再建、あじさい公園の造営など、地元の文化を守る活動に奔走するようになります。といっても、ゼロから歌舞伎・絵画展示・音楽・物品販売などのイベントを企画して、ほうぼう頭を下げて人々の協力を募り、当日の駐車場の草刈りまで気にかけてながら実行する地道な活動です。遠くからもたくさんの来場者が来るようになったことで、最初は戸惑っていた地元の人たちからも少しずつ理解されるようになったそうです。

地元では絵描きというよりイベント屋だと思われる、と可笑しそうにおっしゃいながら、秩父のあちこちを車で回って、現地を見せてくださいました。

## フォト・エッセイ

### 公募展の巡回展

横地 光(神奈川県)

私が高校生の時にある美術団体の公募展が地方の美術館で開催された。その地方の美術館では学生の書道展や地方の美術団体などの発表が主だったので、東京の有名な美術団体の作品を観られる事は、高校生の私には刺激的であった。卓越したデッサン力に裏打ちされた表現力の多彩さに、感動というより打ちのめされた。その作品群の中で、或る作家の作品の前に釘付けになった。躍動的な群像の迫力と独特な油絵の具のマチエールは今まで見たことのない作品だった。その作品との出会いが後に自分の人生を大きく変える事などその時は想像もつかなかった。

その年、私は東京芸大の受験に失敗し、東京で浪人する事になった。予備校で制作する日々。高校生の時に観て感動した作家さんに会いたくなり、意を決して電話をかけてみた。(美術年鑑で調べる)何度目かに連絡が取れ、一回だけという事で作品を見ていただける事となった。初めて先生のアトリエに訪問した時の緊張は今でも覚えている。高校生の時に描いた絵から予備校で描いている作品。スケッチブックを担げるだけ担いで行って批評をしてもらった。先生は一点、一点、丁寧に観て下さり、私はその一言一句をノートに書き残した。批評後、先生は雑談を交え、造形論を話して下さった。先生の家を出た時、5時間が過ぎていた。帰りの電車の中で批評を書いたノートを読み返した。丁寧な先生の指導の言葉の中に自分には絵の才能が無い事を読み解き、情けなくて涙が出てきた。

その後、暗中模索の生活を送っていた中、今度は先生が「作品はたまったかね。」と電話を下された。私は「一回だけ。という事だったので、もう見て頂けないと思ってました。」と答えると「作品が貯まったら連絡なさい。」と返して下さった。それから何度か先生宅を尋ねるうちに先生の絵画に向かう真摯な姿勢と美への追求心に魅了されていった。先生は絵を描く他に華道の家元でもあった。先生は絵の話の合間に、日本の伝統的な美学と造形は世界的に貴重なモノである事を芸術論と交えて話して下さった。先生が展覧会などで花を生ける時、よく手伝いを頼まれた。何度か手伝いをしている内に、『いけばな』への興味が少しづつ沸いてきた。そして美大の一年生の夏に華道相阿彌(そうあみ)流に入門した。

当時印象に残っている出来事がある。先生が権威ある華道展に出瓶する花を手伝っていた時、一番大事な枝を折ってしまった。破門を

覚悟したが、先生は少し微笑んでもう一本、他の所の枝を折るよう指示された。戸惑いながら指示通りに折ると、先生は「風雨で枝は折れ、葉は散る。これ自然の摂理。作りすぎて自然の摂理から離れてはいけない。」と、自分の作品を台無しにして「華の心得」を教えて下さった事は今でも尊敬の念と共に覚えている。

大学を卒業後、私は郷里で教員になり、毎日の業務に奔走していた。そんな中、先生から長い手紙が来た。「数年前から体調を崩し、医師から余命宣告を受けた。小さな流派だから生活の糧にはならないし、相阿彌流には『家元なる者、華道を持って生業にするべからず。』との掟がある。厳しい事を承知して、君に相阿彌流を継いで欲しい。」との内容であった。

生活と師への恩の狭間で迷いに迷ったが、数ヶ月後、再度上京した。それからは先生が入院している病院に毎日のように行き、直接に深くご指導を受けた。先生の介護や病院と複雑な手続きを任せられるようにもなったが、弟子の1人が、公的な手続きをするのは大変だった。その時間も惜しく、両親の了解を得、先生の養子となった。介護と修行の日々はかなり辛かったが、充実した日々であった。

今から34年前の事ではあるが、自分の人生の大きな分岐点であったと思う。お蔭様で、今も絵を描く事と「いけばな」の修行と両方の仕事をさせてもらっている事には感謝している。

長々と私の事を書いてしまったが、私が述べたかったことは、公募展の巡回展で或る作品に出会った事が今の営みの始まりだったという事だ。今ではネットで、簡単に情報が入手できる便利な世の中になったと思う。しかしながら、数ヶ月かけて描かれた大作を間近に感じるのとは感じ方が数十倍違うのではないだろうか。巡回展には展覧会を開催する地域の負担も大きいし、多額の経費もかかる。しかし、絵を描くことを志す人への大きなきっかけになることには違いない。会員の減少などで廃止の方向の意見もあるようだが、出来るだけ続行してもらいたいと切にお願いしたい。

(横地康国先生は養父となり、肉親に敬語を使うのは間違っではいるが、今でも尊敬している師であるので、敬語での表記としました。お許し下さい。)



▲盛夏の燕子花

## フォト・エッセイ

### 意欲的な失敗作からの合点

長崎 羊子(神奈川県)

選ばずの赤、オレンジ、ピンクと子供時代から長い間  
今思えば彩度明度は低く、色褪せた世界が無意識な自分の居心地  
意欲と不明確な自信が低く溢れ  
明るく幸せ風な鈍い空間から、自ずと距離を置くのは変わらないの今  
大きな衝動に駆られ、絵を描き初める、大震災の青の世界  
憂鬱を背負っているような稚拙な甘さに気づきながらも 青の居心地  
2014の初出品100号を「意欲的な失敗作だ」と  
それからの指針となる言葉を友人からもらった  
水の深さを、青の影をその奥を！  
はみ出してキャンバスの裏の向こうの明日に色をつけろ！  
脳内ぐるぐる  
でも自分が見えるのは又もや表の世界だけだったかと  
主体展で飾られた作品を見る度に思う  
ここに来て、やっと見た事のない偶然の色から、  
ゾッとする程綺麗な色や形を見つけられる様になり  
心地良さが小さく重ねられる様になった  
やっとだ、でも多分自分だけの心地良さ  
「描く事は祈りと同じ」と  
会員の先輩Eさんの言葉に全てgatenが行く

飛べそうな気がする  
ほどのgaten! だ  
3.11がありそして  
ウクライナ、ロシア  
No war と毎日小さな  
声と小さな絵をupし  
いいねの友人達と皆で  
毎日一瞬でも思いを馳せ祈りとなれと、続けている  
今日は避難解除が進む福島県双葉町で  
12年ぶりに地元新庁舎の前で昔ながらのダルマ市が開催された  
知り合いが沢山集まる写真が届く  
まだまだ帰還困難区域や中間貯蔵用地で  
泣く泣く家をたたんだ友人などなど  
切ない現状の上での新しい世代に向けた復興事業が進む  
同じ時代に生きて「知る事は背負う事」の言葉が改めて刺さる  
春が来たら自分の桜に会いに行きながら  
花見山へ行ってあの方に会いに行こうと友人のメール  
苗木の成長と共に 私の絵への祈りと言ったら  
桜に欲深さと笑われるに違いない 多分



▲私の好きな野馬追の軍者会議  
(福島県南相馬市)

各地の  
美術館から

## 恩師 山田光春氏と私

名古屋美術館 コレクション展II「郷土の美術：生誕110年 山田光春」  
10月8日～11月27日

中島 佳子(愛知県)

「一点の傑作を創ることより、一人の人間を育てることの方が、どれだけ尊いことか。」この言葉は今も私の脳裏を離れることはない。

当時(1959年)、私は教育大卒業後、小学三年生を受け持つ新米教師だった。クラスの中に、一人授業中に、突然暴れ回る少年がいた。私はなんとか落ち着かせようと必死であった。しかし、授業は遅れ、父兄から苦情があり、ストレスで心の余裕の全くない日が続いた。そんな中、私は夢を捨てきれず、自由美術展に出品したのだ。もともと、教師より画家への憧れが強く、学生時代から先生のアトリエでのデッサン教室にも参加していたこともあり、仲間と一緒に自由美術展に応募していた。その年は4年目であった。結果は、入選はしたものの、審査で保留になっていて危ういところだったと、後に先生からお聞きした。その時の光春先生の言葉が冒頭の言葉である。私は、自分の身勝手さ、心の未熟さを痛感した。と同時に、絵画とは、作家の心の底まで見透かされてしまう、恐ろしいものだと思った。

勤めていた小学校はその後、伊勢湾台風で大変な被害があり、担任として家庭訪問をしていた。その際、その少年は祖母一人に育てられ、淋しさを抱えていたことが分かる。我が家も家が半壊となり、母も倒れ、学校を辞職することになる。半年後、四年生になっていたその少年が、なんと、熱田区から昭和区の我が家まで、1時間はかかる所を一人でやって来たのだ。「先生に逢いたかった。」と、びっくりしたと同時に、胸が一杯になった。話をしているうちに、彼は感受性の強い、頭のいい少年であることを理解した。この経験は私にとって人生の

宝物となった。

私が本格的に、主体展に出品しはじめたのは40歳になってからであ

る。それまでの10年間は、愛知県から奈良県に移住して出品できなかった。やっと大府に戻り、身近なぶどう棚を描き始めた。「君はいいものを見つけた。これからは、ぶどうの木に足を向けて寝れないよ。」と、先生の笑顔であった。私も以前と違った感覚で自然を見ていることに気づきはじめた。

「絵はすぐに理解されるものではない。たった一人の人に届けるような気持ちで描けばいいんだ。」と、心に残る言葉であった。

このガラス絵は、私の結婚祝いにと、1961年に光春先生から頂いたものである。

一羽の鳥が海面すれすれを、夜明けの光を目指して飛んでいる。その凛とした姿が美しかった。しかし先生は、1羽では淋しいからもう1羽入れようと言われた。頂いた時には、上方に少し大きな鳥の姿が加わっていた。びっくりしたものの、それはそれでうれしい気持ちであった。

後に、先生の息子の光一氏にお話すると、「親父のオチャメな性格がよくわかる。」と、楽しい先生でもある。山田光春先生は私にとって、今も大先輩であり、人生の師であり続けている。



▲山田光春「翔」15×22cm

各地の  
美術館から

## 光春先生と青春の一頁

名古屋美術館 コレクション展II「郷土の美術：生誕110年 山田光春」  
10月8日～11月27日

中川 奈哥子(東京都)

昨秋10月18日主体名古屋展の初日に出向き、名古屋美術館で開催中の「郷土の美術 生誕110年 山田光春」に足を運んだ。懐かしい作品達に再会し光春先生の面影が彷彿としたことであった。

先生との出会いは遡ること59年、折しも自由美術家協会内部では分裂の動きが兆し始めていた頃である。受験に失敗した私はすっかり勉学への意欲を失い、元々好きだった絵でも描くかという軽い気持ちで美術部に入った。その顧問であったのが山田光春先生である。ツイードのジャケットを羽織り、ちょっと猫背で一見いかついが、優しい雰囲気の方であった。当時52歳であられた筈だが18歳の私には温厚な老教授という印象であった。お耳から白髪混じりの耳毛がもじゃもじゃと出ていて、箸が転んでも可笑しい年頃の私はお話に身が入らない始末。先生は特に絵画指導をされる訳ではなかったが、私達部員を優しく見守って下さるような立場でおられた。

私と出会った1964年、先生は主体美術創立に参加され中部地方での活動の中心的存在として活躍される。第2回展、地元名古屋にも主体展がやって来た。我々美術部員は愛知県美術館でモギリのバイトをさせて頂いた。公募展というものを観たことの無かった私は興味深く展示を見たが、なんだか暗い絵が多いなと思いつつも自分の描く世界観に近いものを感じた。

翌々年、先生から第4回展の応募用紙を頂き、出してみないかとお声をかけて頂いた。メ切まで3週間しか無かったが、折角先生に薦められたのだからと奮起して30号2点をポスターカラーで描いて出品した。落選しかけたところを大野五郎さんの「面白いじゃないか」の一声で入選したとは後々知ったのだが、とまれ運よく入選したのが私と主体展の

長い歴史の始まりである。

卒業後、先生の個展に何う機会があった。ガラス絵の描法を訊きつつ拝見したが、どれも黒く塗りつぶした画面に尖ったもので引っ掻いた線がランダムに走り、それが光り輝く様で魅入られた。瑛九の研究を進めておられた先生は、分厚い原稿用紙の束を手に瑛九について熱っぽく語られた。私は瑛九の素描の卓越した技量に感嘆したものである。

ほんの軽い気持ちで手を染めた絵画の世界にどっぷりとハマり、「良いご趣味で」と言

われ乍ら子育て、介護の間も描き続けて60年近く経った。病んだ心から沸き起こる負の感情をキャンバスにぶつける事で生き永らえたとっても過言ではない。光春先生との出会いが無ければ主体美術との出会いも無く今の私も無い。残念な事に先生との思い出はそう多くは無い。が、私の青春の1頁に「山田光春先生」の名は欠かせない。

私は第17回展で会員推挙されたが、その年の6月、先生は鬼籍に入られた。会員推挙の報を一番にお知らせしたかったのに叶わず、今でも心残りである。 合掌



▲山田光春「一人」50M(1943年)

各地の  
美術館から

## 「ドナルド・キーンと画家・井澤元一」展

京都文化博物館 2022年8月6日～10月2日

黒川 洋(神奈川県)

2022年は主体美術の創立期の会員の展覧会が各地で開催されました。

第57回主体展の巡回展と会期が重なる展覧会もあり、そのひとつの「ドナルド・キーンと画家・井澤元一」展(会場:京都文化博物館、会期2022年8月6日～10月2日)を訪ねました。

この展覧会は、ドナルド・キーン生誕100年記念として開催されましたが、日本文学研究者であるドナルド・キーンへの親しみもあり楽しみにしていました。学生時代に、ドナルド・キーンとオーティス・ケーリ(同志社大学アーモスト館館長、ドナルド・キーンとはアメリカ海軍日本語学校の同級生)と永井道雄(文部大臣)の鼎談をテレビで観て、その内容はほとんど忘れてしまいましたが、この3人の人柄と交流に心温まるものを感じたものでした。

井澤元一さんは1995年が主体展最後の出品であり、お会いしたことはありませんが、第49回主体展の特別企画「礎の作家たち Vol.2」に展示された「禅堂と白馬」は強く印象に残り、他の作品を観る機会はないものかと常々思っていました。

そんな中で、「ドナルド・キーンと画家・井澤元一」展という展覧会は、両者への興味を抱く私にとってはとても興味深く、文学研究者と画家の仕事への興味もさることながら、どのような出会いがありどのような交流があったのか興味の幅が広がりました。

ドナルド・キーンはオーティス・ケーリの紹介で古民家(無實主庵)に下宿することとなり、そこで同宿の永井道雄に出会ったとのこと。井澤元一との出会いは、日本人の友人を通じて出会ったとのこと。1953年のドナルド・キーンの京都大学大学院への留学によりこれらの交流が始まったようです。ドナルド・キーン31歳、井澤元一44歳です。

ドナルド・キーンによれば「日本の伝統がまだ生き残っているかどうかという複雑なテーマの研究」の案内役として、「絵の展覧会や

能や古寺を一緒に見に行き、伝統の生存という問題について長く論じたことがある。」とのこと。これに呼応して、井澤元一は「京都の風物は、もともと日本画の領域としてなじまれています。もちろん、私も洋画にむかないとして、むしろ敬遠していた一人でありましたが、日本のもの、京都のものにも、あらためて眼を向けるようになったきっかけの一つにはドナルド・キーン氏との出会いが一因であると思います。」と記しています。

さて、肝心の絵の話ですが、展示はドナルド・キーンの自宅に飾られていたという「黄檗山の総門」、師である須田國太郎の影響を受けた風景画、自由美術家協会時代の作品に始まり、主体展出品作が並びます。建造物を描く1975年の「三十三間堂 南大門」、1980年以降には自在の境地と言うのでしょうか京都の祭りを題材に「広隆寺 太秦牛祭」「京都三大馬祭」など、動きのある作品が並んでいました。

念願であった、「禅堂と白馬」以外の作品を観ることが出来、また、文学研究者と画家が交流を通じてそれぞれの仕事に結実していく過程を感じることが出来た幸せな時間でした。

(参考資料:「ドナルド・キーンと画家・井澤元一」リーフレット、展示目録、京都文化博物館。「井澤元一画文集 古都点描」サンブライト出版)

各地の  
美術館から

## 「平野 遼 展」を見て思うこと

北九州市立美術館コレクション展 I 2022年4月9日～8月14日

福田 加奈子(福岡県)

7月も終わりの暑い日だった。北九州市立美術館に「平野遼没後30年展」を見に行った。好きな絵の画家だったので、わくわくする気持ちで入場した。会場での作品「消滅する土地」に釘付けになってしまった。理屈も何も無い。ただああいいなあと思うばかりだった。「裸形の風景」は執念のような凄さを感じた。「混沌の街区」「青い雪どけ」も印象的だった。水彩素描は作者が「線は言葉である」と言われていたように独特の線が躍動してデッサン力もすごいと思った。油彩作品の横には必ず自作の詩が添えられてあり、絵と同様にすごい詩人だと思った。絵も詩も常に死と対峙しているような、抽象と具象の空間を行きつ戻りつした内面世界を表現しているような。

以前、平野遼氏死後のアトリエに伺ったことがある。私は明るいアトリエを想像していたのだが、そのアトリエは、窓に埋め込まれたガラスに自ら板を貼り光を遮断していた。漆黒の空間の中の孤独な魂。闇の画家と評される所以である。光を閉ざしたアトリエでひたすら描き続けていたという。

「死は突然やって来る。その時に無念の思いをしないように。」と清子

夫人に言われていたという。死を予感しながらも、毎日を最後の最後まで身体を酷使しながら描き続けていたのだろう。享年65歳。「深夜雷鳴の中でしきりに鳴き続ける野犬の遠吠えにふと永遠を思っていた。」と。何とも救いのないような生命の孤独。私はこの言葉にゾクとしたのを覚えている。それ故にあのような作品が生まれたのだろうと。本当の絵描きだったと。

美術館で「消滅する土地」の絵葉書を買って、闇の孤独と共に私のストック帳に大切に納まっている。



展覧会記録

2022年8月末～2023年2月末

■つるぎの絵筆展(小林智江子 他)  
8月22日～8月31日  
NICHE GALLERY(銀座3)  
■和田貴子展  
8月29日～9月3日  
画廊宮坂(銀座7)  
■artbook事務局のギャラリー(落合梨乃 他)  
9月2日～9月25日  
artbook事務局のギャラリー(恵比寿3)  
■exhibition twice up! VI part1  
(北村奈美、久我英輔、新島知夏、前川アキ)  
9月5日～9月11日  
あかね画廊(銀座4)  
■第44回北海道ロビー絵画展  
(續橋守、佐藤善勇、齋藤典久 他)  
9月9日～9月18日  
ギャラリー絵夢(新宿3)  
■twice up! VI part2  
(上野信彦、大西佐頼、福田和幸、前山陽子)  
9月12日～9月18日  
あかね画廊(銀座4)  
■前川アキ絵画展—季節の透き間  
9月17日～9月26日  
Gallery Retara(札幌市)  
■触れる記憶。日大大学院芸術学研究所グループ展(陳佳き 他)  
9月19日～9月25日  
ギャラリー絵夢(新宿3)  
■そ・れ・ぞ・れ・の今展PartIV(田中和枝 他)  
9月28日～10月2日  
豊田市民文化会館B展示室(豊田市)  
■齋藤典久展  
10月3日～10月9日  
ギャラリー・コパンダール(京橋2)  
■名古屋美術館常設展 コレクション展II  
郷土の美術 生誕110年山田光春  
10月8日～11月27日  
名古屋美術館(名古屋市)  
■「象の内・外」2022(長沢晋一 他)  
10月10日～10月22日  
ギャラリー絵夢(新宿3)  
■彷徨うて、なお足の向くままII  
(鳩貝悦子、檀原恵子 他)  
10月24日～10月29日  
ゆう画廊(銀座3)  
■第4回石ころ展(関谷昌夫、大口満 他)  
10月28日～10月31日  
大島画廊2階ギャラリー(上越市)  
■亀山トリエンナーレ2022(オノミチヒロ 他)  
10月30日～11月19日  
三重県亀山市市内一帯  
■草莽の風展(松本恵美 他)  
10月31日～11月5日  
K's Galley(銀座1)

■岡本裕介個展  
11月1日～11月6日  
ギャラリー中井(京都市中京区)  
■CAFネビュラ展(長沢晋一 他)  
11月2日～11月13日  
埼玉県立近代美術館(さいたま市)  
■美岳画廊開廊50周年記念展(山本靖久 他)  
Part1 11月7日～11月12日  
Part2 11月14日～11月19日  
美岳画廊(中央区八丁堀)  
■Sensibilities(荒木篤子 他)  
11月10日～11月15日  
Art Space88(東京都国立市)  
■大野五郎作品展  
11月12日～2023年6月4日  
東京都北区飛鳥山博物館  
■アートでつなごう福島展(山田礼二 他)  
11月13日～11月23日  
とうほうみんなの文化センター(福島市)  
■ART CHRISTMAS2022(新野安紀子 他)  
11月25日～12月3日  
わたなべ画廊(埼玉県熊本市)  
■7人展(中村陽子、平田 誠、藤原アツ 他)  
11月30日～12月6日  
鶴見画廊(横浜市)  
■12月の不思議な世界(水戸麻記子)  
12月1日～12月23日  
ユニバーサルカフェMinna(ミンナク)(札幌市)  
■のこす つなぐ よみがえる 小田原市民会館  
大ホール壁画の記憶展vol.1(西村保史郎)  
12月3日～12月13日  
小田原三の丸ホールギャラリー回廊  
■リラの森展(續橋守 他)  
12月5日～12月11日  
画廊楽II(横浜市)  
■山本靖久展 透過する感触—Sence of permeation  
12月5日～12月11日  
あかね画廊(銀座4)  
■冬シリーズ(桑原雄一 他)  
冬の鼓動 12月5日～12月10日  
冬の情景 12月12日～12月17日  
冬の記憶 12月19日～12月24日  
美庵GALLERY(新橋)  
■本間由佳個展 一片  
12月5日～12月19日  
Cafe B13(世田谷区)  
■ギャラリーレタラ・ファイナル  
(工藤悦子、永井美智子、前川アキ 他)  
12月7日～12月25日  
Gallery Retara(札幌市)  
■2022三重の作家たち展vol.8  
(小野道宏 オノミチヒロ 他)  
12月10日～12月18日  
三重県文化会館ギャラリー(三重県津市)

■結城智子展 一楽園の寓話—  
12月12日～12月18日  
あかね画廊(銀座4)  
■ヴェロン會(井上樹里 他)  
12月12日～12月24日  
高輪画廊(銀座8)  
■巨大じゃがいも・世界の子ども(ウクライナ他)  
コラボレーションアート(浅野修 他)  
12月13日～12月19日  
2023年2月7日～2月20日  
鎌倉生涯学習センター地下ギャラリー(鎌倉市)  
■Ange de Noël(山本靖久 他)  
12月16日～12月26日  
ギャラリー絵夢(新宿3)  
■白と黒の間に展(柏木喜久子、長沢晋一 他)  
12月19日～12月24日  
ギャラリーGK(銀座6)

2023年

■第13回新春ボン・デ・ザール展(本郷梨衣 他)  
1月4日～1月9日  
ノリタケの森ギャラリー(名古屋市)  
■新春ガラス絵展  
(浅野修、井上樹里、中村輝行、山本靖久 他)  
1月9日～1月14日  
銀座ぎやうりいサムホール(銀座7)  
■山口長男・野見山暁治と美術展(長沢晋一 他)  
1月9日～1月15日  
銀座ギャラリー ムサシ(銀座1)  
■第1回箔絵展(斎藤望、山本靖久 他)  
1月16日～1月22日(日)  
あかね画廊(銀座4)  
■浅野修展  
1月17日～1月28日  
K's Gallery(銀座1)  
■アートフォーラム三重2023 沸展  
(オノミチヒロ 他)  
1月18日～1月22日  
三重県総合文化センター(三重県津市)  
■細矢恵美子展  
1月23日～1月29日  
画廊楽II(横浜市)  
■第7回M-art'79展(山崎 弘 他)  
1月30日～2月4日  
画廊宮坂(銀座7)  
■第20回冬季ミニチュア100人展  
(伊藤明美、柴田かよ子、水谷幸子 他)  
2月14日～2月26日  
ギャラリー名芳洞(名古屋市)  
■主体展秀作家(2022)と会員小品展  
2月16日～2月28日  
ヒルトピア アートスクエア(新宿)  
■第56回主体美術中部作家展  
2月28日～3月5日  
愛知県美術館ギャラリー(名古屋市)

機関紙「主体美術112号」制作スタッフ

■事務局作業員 齋藤 典久(責任者) 山田 礼二(機関紙部) 大西 佐頼(機関紙部) 黒川 洋(会計)	■執筆者 豊福 光行 藤本 卓 藤田 俊哉 井上 樹里 森 慎司 伊藤 明美	■校正 大西 佐頼 長崎 羊子 中島 佳子 井上 樹里 黒川 洋 藤本 卓 大西 佐頼	返町 勝治 藤田 俊哉  ■カット 小菅 光夫 (巻頭・アトリエ訪問)
---	--	--	--

※ホームページに展覧会情報の掲載を希望される方は、DMを事務局 研究部 小林 までお送りください。その情報は機関紙にも反映されます。(会員・出品者を問わず掲載いたします)

ウクライナへの人道支援寄付について

「ウクライナ人道危機救援金」として、昨年11月28日、日本赤十字社宛に機関紙の売り上げ全額4,840円の振込を行いました。ご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。

編集後記

■アトリエ訪問で秩父の小菅さんを訪ねたのは1月の身も凍るような強風の日でした。「今日は特別寒いけど、7月の1週目があじさい祭りだから、その頃にまたいらっやい」と言ってくれたので、どなたか、7月に一緒に行きましょう! 小菅さんがお仲間と造営された広大な公園の一角に特別に仕つらえた舞台で小鹿野歌舞伎が見られるそうです。(大西佐頼)

■コロナ禍になって4年めの春を迎えました。会員、出品者の中にも感染してしまつた方が多くいるようで、今後も注意が必要です。5月にも新型コロナウイルスは2類から5類に引き下げられるという話です。ワクチンの受け方はどうなる? 集団接種は? 医療逼迫しない? など、不安はあります。主体展はこの間、懇親会も研究会もお休みしました。それがこの58回展では復活できそうです。まだ参加者は多くはないでしょうが、久々にみなさんの顔が見れるし、作品について語り合えるのはひじょうに楽しみです。(山田礼二)

2023年度事務局体制

■責任者/齋藤典久 ■会計/黒川 洋  
■展覧会/山崎 弘・藤本 卓  
■研究/小林宏至(DM受付担当)・上野信彦・井上樹里(ホームページ)  
■広報/【図録・出版】北村奈美・前山陽子【機関紙】山田礼二・大西佐頼  
【発送】落合梨乃 【広告】新野安紀子  
◆巡回展/京都:森 慎司 名古屋:伊藤明美

2023年 第58回主体展 日程

本 展/東京都美術館(上野公園)  
2023年9月1日(金)～9月17日(日)16日間(4日は休館)  
公募搬入/2023年8月22日(火)・23日(水)  
東京都美術館地下3階  
京 都 展/京都市京セラ美術館本館2階北  
2023年9月26日(火)～10月1日(日)  
名古屋展/愛知県美術館8F  
2023年10月17日(火)～10月22日(日)